

11月9日 (木曜日)

椎葉から宮崎のシーガイアへ ドライブで神遊び

椎葉は私が小学6年生のとき過ごした村で、学年クラスの友人のほとんどが「椎葉」か「那須」姓だった。名前を呼ぶとみんなが振り返るというユニークな体験をした。

中元暢一の「悠」誌より

柳田國男のような秀才ではなく、南方熊楠のような天才でもなく、宮本常一のような奇才でもなく、梅原猛のような学仙でもなく、果して私のような鈍才の英語バカが、民族、いや民俗学者として勝負できるだろうか。この歳で。しかし、昨夜、織部邸でドブロクを飲みながら、松本道弘民俗学覚醒(めざめ)の地と言挙げしてしまった。A critical mistake? いや私は旅人だ。旅そのものがリスクだ。私を守るのは英語の剣だ。今回のツアーで手から離さなかった『天皇家の“ふるさと”日向をいく』がヒントになった。

神楽(かぐら)こそ 縄文の心と梅原 言い

私もそう思う。椎葉民俗芸能博物館で黒木勝美氏から教わった、梅尾部落の神楽のテーマ(弘法大師の訪問)を聞いて、もう一度訪れたいと思った。能、狂言の原点になるのではと思った。観光用のものではないというスタンスが嬉しい。相手がクールであれば、磁石となる。電池のように常に見せ、露出しなければ賞味期限が切れる芸は本当の芸でない。

若水に酔えぬ私も旅人か

初めて、若山牧水の実家の中を拝見し、記念文学館を訪れた。昨年4月に建てられたピカピカの記念会館で、歌心を学んだ。石川啄木に影響を受けたらしく、骨肉の愛の哀しさがひしひしと伝わってくる。たしかに彼は旅人だ。マイペースで生きている。

歯を痛み泣けば背負いてわが母は

峡(かひ)の小川に魚を釣りにき

「思い出の記」『路上』 若山牧水

われを恨み罵りしはてに噤(つぐ)みたる

母のくちもとにひとつの歯もなき

牧水が自分の母を歌ったこの辺り、私の母を偲ぶ私の別れの歌とよく似たパトスが重なる。ただ、それでどうしたと私は開き直る。日本全土に牧水の歌碑はある。しかし故郷の思い出は暗いものばかり。熊楠の狂気や世直しのための覇気は感じられない。旅・酒・山・川——これだけ好き勝手ができしたのは、もしかしたらスポンサーがいたためか。どうもピンとこない。私と重なることが多すぎて、近親増悪を感じるのかもしれない。シーガイアまでのドライブの間に聴いた「椎葉の歌と民謡」のテープの方が遥かに純朴だ。椎葉は本当に気に入った。